



Title	金山崇教授のご退官にあたって
Author(s)	好田, 實
Citation	大阪外大英米研究. 1994, 19, p. 13-15
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/99164">https://hdl.handle.net/11094/99164</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 金山崇教授のご退官にあたって

好 田 實

金山崇教授は今年1月3日に満六十五歳を迎えられ、3月限りでわれわれは先生をお送りしなければならなくなった。研究と教育の両面でまだまだわれわれのそばでご活躍いただき、頼りにさせていただきたいと願うものであるが、停年制度によるものであればこれも致し方ないことである。1985年から'88年にかけて、同じ定めにより、森塚教授、林学長、上山教授が次々にご退官になったが、数年を闊して、ここにまた金山先生とお別れせねばならないのは、同じ昭和一桁生まれの私にとって寂しさ一入のものがある。さりながら、短期大学での4年を合わせて実に33年の長きに亘り、本学の英語教育に尽瘁され幾多の有為の人材を世に送り出されたことを思うとき、ご退官おめでとうございますと素直にお慶び申し上げねばならないと思う。あとに残るわれわれ一同の深い感謝と祝意を表すべく、ここに『大阪外大英米研究』第19号をご退官特集号として先生に捧げる次第である。

私の金山先生との最初の出会いは、先生はお気付きでないと思うが、たしか私が大阪外大英米学科4年のとき、鷗外の『高瀬舟』を英訳した林栄一先生の英作文の授業で、一際目立って力のある少し年長の学生を発見したときである。それが金山先生であった。既に兵庫県の高等学校で英語を教えておられたのであるが、2年に編入学され、学年は私より一年下であった。翌年先生は在学中にフルブライト高校英語教員留学生として渡米され、ミシガン大学で研鑽を積まれたのである。ご卒業後しばらく高等学校教諭を続けられたのち、大阪大学大学院文学研究科に進まれ修士論文では Chaucer の英語を扱われた。その後一貫してMEの、主として散文の語順を研究され、

Chaucer や Rolle の作品についての実証的な統計処理と綿密な分析による秀れた業績を残された。1973年に循環系統の病気でたおれられたことがあるが、周囲の人から洩れ聞いたところによると、病床の先生は夢現の中でOE詩を口吟まれたとのことである。研究一筋の真面目なお人柄をよく表わしているエピソードである。ご病気を転機にOE詩、MEロマンス、バラッドの日本語訳に力を注がれるようになったが、古い英語の造詣の深さは言うに及ばず、先生の日本語表現の豊かさ確かさに驚かされるのは私一人ではなからう。また先生は並々ならぬ語学の才を活かして The Reeds にも毎号のように日本文学の英語訳を寄せられ、わが英語学科の良き伝統を守り育てるのに貢献された。

同じ英語学科でも私は二部に所属していたため、金山先生とのお付き合いの深さからすれば、他により適当な人がいらっしゃるが、年長の故に私が改組後の英語専攻語代表の重責を背負わされている関係で、この蕪辞を連ねているわけである。至らないところはお許し願いたい。先生は'85年から6年間一部英語学科の主任を務められた。先のご病気は難しい病と聞いていたが、よく摂生され持ち前の忍耐と責任感で主任の雑務をも手際よく片付けていかれた。その間に私の二部英語学科主任の時期とも少し重なり、お互代表として交渉もなかったわけではないが、特に印象に残っているのは入学試験の出題でたびたび一緒に仕事をしたことである。実に細かい点まで気を配られ、出題文の語彙の難易度の点検など慎重かつ精緻な作業を積み重ねていかれるのには感心させられた。言葉数の少ない先生であったが、それだけに会議の席での熟慮の後にされる簡潔な発言は常に的を得ていて重みがあった。喧々囂々の議論にも穏やかに耳を傾けられ時宣を得て的確な判断を示してうまく纏めていかれたように思う。学会でのご活躍も多分そのようなものであったろうと推察する。

金山先生の研究上の最大のご関心はME韻文の語順であり、これまで行われた散文についての調査はその予備作業の意味もあると承ったが、'90年には再びME散文の語順についてご研究の成果をシンポジウムで発表された。

金山 崇教授のご退官にあたって

退官なさったのちもご健勝に恵まれてこの方面のお仕事を集大成されることをお祈りするものである。定年という人工的な区切りで一応お別れしなければならなかったが、今後とも変わらぬご指導ご鞭撻をお願いして筆を擱くことにする。